
バスに乗って

弘道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バスに乗って

【Nコード】
N0725Z

【作者名】
弘道

【あらすじ】
ふと、真夜中に何処かへ行きたくなる時はありませんか？
そんなあなたに、【宵闇バス】

「快適で満足できる旅をご約束します」

あーあ。

ある程度大人になり、自分はすっかり無感動な人間になったものだと思います。思っていたけれど。

やっぱり何年も付き合ってた結婚直前になった男に浮気されて別れるのは辛いものだった。

別れる時も涙の一つ流さず、あらそう、じゃ、お幸せに。大人の余裕で流した。

まさか次の日の夜に一気に辛くなるとは思わなかった。

今思えば今週は不運が積み重なっていた気がする。

いつも可愛がっていた野良猫が目の前で知らない人に連れていかれたのも辛かったし（でも優しそうな人だった。私と違って大切に飼ってくれるのだろう）。

課長に仕事を押し付けられ、結果だけ全部持ってかれたのも苛立った。

久しぶりにあった元彼はすごく幸せそうに彼女の写真を見せてくれ、こんど、結婚するんだと言っていた。

みんなみんな幸せなのだ。

羨ましいとは少し思うが、きっと私にいま大きな幸福が訪れても小心者の私は辞退してしまうんじゃないだろうか。

あー、旅にでたい。海が見たい。冬の日本海。おばあちゃんちの側にあるあそこ。

旅にでたいがもう終電も終わっている。

仕方なく近所のコンビニへ評判の肉まんを買いにふらりと出かけて行った。

「あれ、こんなところにバス停あったつけ。」

コンビニの帰り、肉まんを頬張りながらふらふらといつもの道を帰ると、バス停があった。

そのバス停はなぜか照明のないこの暗闇でぼんやりと浮かび上がり、その存在を主張していた。

私は惹きつけられるようにそのバス停の側へふらふらとよって行く。

【宵闇バス 目的地行き】

看板にはそう書かれていた。

「宵闇バス？初めて聞いたわそんな名前…新しく増えたのかな？てか目的地行きて目的地が何処なのかわかんないけど何処へ行くんだろ…路線図も無いし…」

キーツ。

「えっ!？」

何時の間にか後ろにはバスが止まっていた。もう深夜なのに。

不審に思うが、それでもちょうど何処かに行きたいと思っていた所である。日帰りできるかな、まあいいや財布があればなんとかなるしキャッシュカードも入ってるからそこで下ろそう。

そんな軽い気持ちでバスに乗り込む。

「おや、珍しい。お客さんなんて久しぶりでしよう。お客さん、何処に行きたい場所がありますか？」

「へ? ああ、ああ、海辺へ行きたいです」

「ご乗車、ありがとうございます。このバスは海辺行き海辺着です。お降りの際は降車ボタンを押し、完全に停止するまで席を立たないようお願いします。」

客の都合で好きなどこへ行くなんて、タクシーじゃあるまいし。ま、いっか。ここから日本海は遠いから、太平洋か…海辺にいけるだけまし。

客は私しか居ないしタクシーみたいなものだと思って運転手さんに話しかける。

「すみません、このバスいつから運行しているんですか」

「いつからでしたかね…もううーんとむかしだから忘れてしまいました。」

「運転手さんはいつからこのバスを？」

「それもとて昔なので忘れてしまいました…。」

意外。とつても若く見えるのに…いや？おかしい。けど、そもそもこのバスがおかしいの塊だ。気にしないでおう。

「終点ー終点ー海辺ー。海辺ですー。またのご利用お待ちしております。」

いつの間にか寝てしまっていたようだ。本当に海辺である。

何処か懐かしい風景。

「料金、おいくらですか？」

「340円になります、そちらへどうぞ」

思ったより安い。こんな値段でこれる距離に海辺は有ったつけ。

「またのご利用お待ちしております。――宵闇で、会いましょう」

不思議な挨拶に会社のサービスなのかな、と思ってしまう。

バスを降りると、バスは表示を【回送】に変えて音もなく何処かへと消えていった。

「わ、嘘お…」

本当におばあちゃんちの側の海辺みたい。

あ、でも…

「帰り、どうしよう…」

「貴方が宵闇でバスにであつたら、是非とも乗ってください。きっと快適で満足できる旅をご約束します」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0725z/>

バスに乗って

2011年12月2日20時55分発行